

ヘブル人への手紙7章25節 「完全に救う方」

1A とこしえの祭司

1B いつも生きておられる方

2B 執り成してくださる方

2A ご自分によって神に近づく人々

1B イエスのみにある道

2B 父の御手

3A 完全な救い

1B 究極の救い

2B 永遠の救い

本文

ヘブル人への手紙7章を開いてください。私たちの聖書通読がヘブル6章まで来ましたが、7章を午後礼拝で一節ずつ学びますが、今朝は25節に注目します。「**したがってイエスは、いつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるので、ご自分によって神に近づく人々を完全に救うことができになります。**」

1A とこしえの祭司

私たちは、ヘブル人への手紙の著者が、メルキゼデクという祭司について語りたがっているのを読むことができました。ついに、ここ7章で、この人物について語ります。彼が、これまでのレビ族のアロンの家系に属する祭司ではなく、いつまでも生きている存在であることが分かります。地上の祭司ではない、天からの祭司であることが分かります。それで詩篇110篇には、キリストについて、「あなたは、メルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である。」とあります(4節)。主は、今も生きておられる祭司だということです。

私たちはこれまで、いかに私たちが祭司を必要としているかを学んできました。アダムが罪を犯した時以来の世界には、罪からくるあらゆる苦しみと災いがあります。そして、人の身体は、永遠に生きるように造られていたけれども、罪が入ったので、朽ちるものになりました。それゆえ、弱さを常に持っています。それで、いつも、神に近づくということを思う時に、そこには大きな隔たりを感じるのです。永遠に生き、疲れることなく、まどろむこともない神です。どんな制限からも自由にされている、全能全知の神です。ですから、肉体の苦しみの中で訴えるヨブは、自分には仲裁者がいないと叫びました。「9:32-33 神は、私のように人間ではありません。その方に、私が応じることができるでしょうか。「さあ、さばきの座に一緒に行きましょう」と。私たち二人の上に手を置く仲裁者が、私たちの間にはいません。」自分の苦しみを訴えようにも、神との間に仲裁者がいないと嘆

いているのです。

そこで祭司の役割が必要です。祭司は、人々のために、その弱さのゆえに神の前に出て、執り成します。執り成すとは、王の前で誰かのために、その人を憐れんでくださるようお願いすることです。そして、祭司は神の恵みを、御前で知り、その恵みと祝福をもって、人々の前に出て分かち合います。神の前では人々を代表して出ていき、人々の前では、神の恵みと祝福を分かちあいます。このような神と人との仲介の働きをしているのです。「I テモ 1:5 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。」イエス様によって私たちは、すべてを超越した、全知全能の神を、そのまま知ることができる、とてつもない恵みにあずかっています。

1B いつも生きておられる方

ところで、ここで著者は、「**いつも生きていて**」と強調しています。アロンの家系の祭司たちは、もちろんいつかは死にます。それで、これまで大勢の祭司たちがいました。その祭司職は完全ではなかったのです。けれども、メルキゼデクの例に倣った祭司職は、いつまでも生きています。地上の祭司は、それはそれで、神のいのちと恵みを分かち合ってくれましたが、そこには不十分なところがあり、いつか廃れるという定めがあったのです。

私たちが生きている世が、そのようなものです。それぞれに恵みがあって、それがいつまでも続くわけではない不完全なものです。分かりやすく言うならば、スマホの電池のようなものです。一日のうちに、せめて一回は充電しなければ、電池が切れて使えなくなります。その電池が機能しているのは、もちろんありがたいことですが、「いつまでも保つ電池ができれば、どれだけよいことだろうか？」といえますね。イエス様は、霊的に、ご自身が、尽きることのない、いのちの水を持っているというところで、語っておられました。サマリアの女に対して、井戸の水と比べて語られています。「ヨハ 4:13-14 イエスは答えられた。「この水を飲む人はみな、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」

主は、死者の中からよみがえられました。弟子たちが、死んだと思っていたイエスが、彼らのど真ん中におられたことを知りましたね。「ヨハ 20:26 八日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと一緒にいた。戸には鍵がかけられていたが、イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。」目には見えなかったのですが、実は主はおられたのです。そして、主は天に昇られて、今にいたるまで、父なる神の右の座におられます。主がよみがえられてから、すでに二十年以上経っていても、それでも、使徒パウロが福音宣教の働きをしている時に、「使徒 23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならない。」とされています。イエスがよみがえられて、生きておられることは、今に至るまで終わっていないのです。目には見

えなくとも、聖霊によって私たちの間に住んでくださっています。

2B 執り成して下さる方

そして、執り成して下さっているんですね。「ロマ8:34 だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなして下さるのです。」

イエス様は、弟子たちのために、執り成して下さっていました。十字架にはりつけにされることが間近になっていた時に、ペテロに言われました。「ルカ 22:31-32 シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい。」サタンによって、ペテロの信仰が試されます。彼がつかまらずいて、信仰を捨ててしまうように仕向けていました。けれども、イエス様が、祈って下さいました。ご自身を否んでも、それでもつかまらずに、立ち直ることができるように、その信仰のために祈って下さっていました。だから、主が言われているように、立ち直ったら他の兄弟たちをカづけることができたのです。

そして、十字架につけられた時でさえ、執り成しの祈りを献げました。「ルカ 23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた。」この祈りを献げても、なお、あざ笑っていました。しかし、祈りは聞かれています。ご自身の両側に、二人の犯罪人が十字架にかけられています。一人は、俺たちを救えと要求しました。けれどももう一人は、「自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。」といいました、そして、こう言いました。「イエス様、あなたが御国に入られるときは、私を思い出して下さい。」(ルカ 23:41,42) 主の執り成しが、すでに窓なりの犯罪人の心によって聞かれています。そして、主がよみがえり、天に昇られ、聖霊が弟子たちの注がれた時に、ペテロが説教をしました。すると、「人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、私たちはどうしたらよいでしょうか。」と言った。(使徒 2:37)」とあります。そして彼らは悔い改めて、バプテスマを受けました。罪が赦されたのです。このようにして、主の執り成しの祈りがあるのです。

私たちは罪を犯すべきではありませんが、犯してしまった時、執り成して下さる方がいます。「Iヨハ 2:1-2 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなして下さる方、義なるイエス・キリストがおられます。この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。」

この、執り成しによって、私たちは、神の救いにおいて、いつまでも守られているのです。なんと幸いなことでしょうか！

2A ご自分によって神に近づく人々

1B イエスのみにある道

そして、「**ご自分によって神に近づく人々**」と言っています。ただ神に近づくのではなく、イエスご自身によって神に近づきます。イエス様は、ユダヤ人の指導者たちが、聖書のことをよく調べても、永遠のいのちを得ていないことを次のように話しました。「ヨハ 5:40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」イエス様のところに来ようとしません。なぜならば、ヨハネ 3 章 20 節によると、この方のところに来るのは、自分の闇が光によって照らされるからです。それを恐れて、闇を愛するために、主のところに来ないのです。

しかし、「3:21 真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る。」とも、主は言われています。イエス様は、何度も何度も、ご自分のところに来る人に、いのちが与えられることを語られました。「10:27 わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けず。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます。」このように、イエス様こそが、道であり、真理であり、いのちなのです。この方によってのみ、父なる神のところに来ることができます。

2B 父の御手

そして、「**完全に救うことができになります。**」と言っています。主イエス様によって、神のところに来る人は、神ご自身が決して見放すことはない、だれも奪い取れないことを約束してくださっているのです。「ヨハ 10:28-29 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りません。わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です。だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません。」イエスの手から、神の手から決して奪い去られることはない、と言われます。

3A 完全な救い

そこで、著者は、「**完全に救う**」ということを言われています。イエス様がいつも生きていて、執り成しておられるので、完全に救うことができになるのです。御手から外れることなく、永遠のいのちが確実に与えられるのです。

1B 究極の救い

ここの「**完全**」という言葉には、二つの意味があります。一つは、「究極」という意味合いでの完全です。どんな状況が来ようと、主は最後まで、私たちが救われるのを面倒みてくださるということです。究極なまでに、主は、私たちがつまづかないように守ってくださいということです。ユダの手紙には、「**あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びとともに**

栄光の御前に立たせることができる方」とあります(24 節)。

私たちは、これまでヘブル人への手紙で、信じて、初めに与えられた確信を最後まで保っていれば、キリストにあずかれるということを学びました。私たちが、信仰を最後まで保っているという責任はあるのですが、しかし、その保っていることの努めには、すべて主が守ってくださっているという、神の圧倒的な守りの御手があるのです。

その究極の救いについて、イエス様は、捕えられる直前に祈られていました。ヨハネ 17 章です。これは、子なるキリストが父なる神に祈られた、至聖所の祈りとも言われます。もっとも親密な祈りの一つです。11 節にこう書いてあります。「ヨハ 17:11 わたしはもう世になくなります。彼らは世にいますが、わたしはあなたのもとに参ります。聖なる父よ、わたしに下さったあなたの御名によって、彼らをお守りください。わたしたちと同じように、彼らが一つになるためです。」父なる神の御名の中に、彼らを守っていてくださいと祈っておられます。

そしてイエス様ご自身も、ご自身の名の中に、彼らを守ってこられたと祈られています。「17:12 彼らとともにいたとき、わたしはあなたが下さったあなたの御名によって、彼らを守りました。わたしが彼らを保ったので、彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためでした。」この、滅びの子とはイスカリオテのユダのことです。主のみこころがなければ、このように滅びることは決してないのだという保障なのです。

私たちは、どんなことがあっても、その救いの御手から漏れることはないことは、ロマ 8 章でもパウロが教えています。私たちが、自分が神から見捨てられているのではないかと感じてしまうことがあります。それは、自分には理解できないことが起こる時、また、苦しみがある時です。しかし、神は私たちの、うめく祈りに御霊によって付き合ってくださいます。「8:26-27 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださいます。人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなしてくださいますからです。」苦しい時には、自分では神のみこころが何なのか分からず、どう祈ればよいことが分からないことがあります。けれども、ことばにならないうめく祈りの中に、実は御霊が助けてくださって、神のみこころにかなった祈りを献げることができるのです。

私たちは、祈りについて、自分で作り上げてしまうことがあります。繕ってしまうことがあります。ある人が、自分に課せられた役割について、自分にはできない、やりたくないとまで思いました。そこでその人の友達は、「自分がその役割を果たしたくないと祈ったの？」と尋ねました。「いいえ、その役割を果たせるようにとは祈ったけれども。」と答えました。そこで友人は言いました。「その、やりたくないということも、神さまに祈ったら？本当に、神のみこころならば、はっきり示してくださいます

はずだから。」と励ましたのです。自分がやりたくないということも、正直に、主に申し上げているうちに、主が確かに、その人を用いることがみこころであると、改めて示してくださいます。御霊が、必ず、ことばにならないうめきの中で、みこころに沿って執り成してくださるのです。

そして、父なる神は、予めご計画を持っておられて、すべてのことを相働かせて、善としてくださいます。「ロマ 8:28-29 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。」すべてのことは、御子のかたちに似せて変えられていくという、良きことになるために、相働かせてくださっているのです！御子にある、豊かな祝福が、そのお姿にあずかるという祝福が、すべてのことの中にあります。

そして、最終的に神が定めておられる救いは、これです。「ロマ 8:30 神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。」主は、私たちが栄光の姿に変えることをすでに決めておられます。過去形、完了形で、栄光をお与えになりました、とありますね。このことを、すでに初めから定めておられたのです。主の定めにしたがって、召されて救われました。そして、召された者を義と認められました。そして、その義と認められた者たちに、栄光を与えられました。

ここまで徹底した救いは、どこにあるでしょうか？究極なまでの救いと言ってよいでしょう。主ご自身が執り成して祈り、私たちの内に住まわれる御霊が、うめきとともに執り成して下さり、その執り成しを、ご自分の計画に沿って聞いておられるのが、父なる神です。三位一体の神が、総動員で私たちの救いを完全なものにしておられるのです。

2B 永遠の救い

そして、「**完全に救う**」の、「完全」の言葉には、「永遠」があります。主が救われる時に、途中であきらめて見捨てることはないということです。最後の最後まで救ってくださったということです。私たちは、最後まで最初の確信を保っているように命じられていますが、それは、最後まで救いを定めてくださったからです。途中で確信を捨てる人たちは、その最後まで神の救いから自分の身を遠ざけてしまうことに他なりません。

永遠の救いですが、その姿が幻の中で、聖書の最後に出てきます。天のエルサレムがあります。「黙 22:1-2 御使いはまた、水晶のように輝く、いのちの水の川を私に見せた。川は神と子羊の御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせるいのちの木があって、毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒やした。」主は、ここで「子羊」と呼ばれています。つまり、天のエルサレムでも、イエス様が刺された釘の跡が、まだ

残っていると思われます。主は復活のからだ、栄光のからだをお持ちですが、この傷だけは残しておられるのでしょうか。それは、なぜか？主の愛が、とこしえまでも続くことを示しているのです。私たちの罪が、この傷によって癒されたことを示しているのです！

そして、その御座から、生ける水が流れていて、その両側に、いのちの木があります。実を結んでいますし、「その木の葉は諸国の民を癒やした」とあります。木の葉は、ちょうど薬用の草のようにして、罪の赦しにある癒しを与え続けるのです。主は、永遠の愛で愛して、またその救いと癒しも、途切れることなく、永遠に行ってくださいているのです。

ここまで、完全な救いなのです！私たちはもはや、この世において困難があろうとも、苦しみがあろうとも、いつも生きて、執り成してくださるキリストがおられ、完全な救いを提供して下さっています。この救いを、自分の勝手な思い込みや、思い上がりで、ないがしろにすることがないようにしてください。主の中に留まりましょう。